

『鼠の草子』に見える小歌

真 鍋 昌 弘

語り物や物語の中に散見する、歌謡あるいは歌謡らしき部分を指摘・判定し、それぞれ具体的に、歌謡史における継承関係・実体などについて述べておくことは、歌謡研究でまだ必要な一面であろう。それら語り物や物語の中の例は、歌謡集に書き留められた場合よりも、むしろその実体の諸相をよりゆたかに示していることがしばしばあるとも言える。

すでに述べたこの種のいくつかの拙稿に加えて、今回は『鼠の草子』系統に書き込まれている小歌に私注を加えてみる。

(一)

『ねずみのさうし』（絵巻一巻。天理図書館善本叢書『古奈良絵本集』所収。『鼠の草子絵巻別本』として収められている分）には、周知のごとく、鼠の権の頭と人間の姫君との祝言の場に立ち働く多くの鼠達が描かれ、かれこれの会話や名前などが書き込まれてい

る。おそらくは、この絵巻成立当時の、あるいはそれ以前の、時めく長者家敷の時の日の風俗がうつし出されているのであろう。そうした中に、『古奈良絵本集』の編者、岡見正雄氏もその解説の中でふれられているように、いくつかの小歌がうたわれている。いま場面の順に取り上げてゆくこととする。

まず、つるべ井戸で、水を汲む女鼠が、

。しのひのつまによねくれて おちやのみつくめとも おけにたまらぬ

とうたっている。井戸端が、鼻歌としての、あるいは労働歌としての小歌が持ち出される一つの場であったのである。風流師歌で、

。さかい小女郎が水汲むは 肩にかい桶手にひしやく 小うた

小節で水を汲む さかいおどりはひとおどり 面白や（京都・

伊根町・花のおどり）『丹後の民謡』

とうたわれるようなそういう場面であり、また「お茶の水汲めど

も」などあるところから、『お茶の水』とか『水汲』とか呼ばれる狂言にも見えるような逢引きの場としての雰囲気もたじよう。別に、

。向いの山で茶の水くめば 十九の殿に手を締められる… (篠原踊歌・向の山踊)

なども引きあいには出してよからう。

これと同類歌を、いまのところ指摘することはできない。ただし、歌謡史上注意されるのは「お茶の水汲ども桶に溜まらぬ」とあるその「溜まらぬ」で結ぶ一連の歌謡である。

。あさかげにかみゆいさげて花つみに行 花つめばとのがまねく花もたまらぬ… (三州設楽郡『田歌写』・朝)

。朝起きて髪結さげてやの花つめば 花つめば 若衆が招くやの花もたまらぬ (『御船歌留』・花揃)

。朝露に髪結いあげて花つめば 男が色で花はたまらぬ (群馬・勢多郡・田植歌) 『群馬県郷土民謡集』

。てらてらと照りしの中に花摘めば 殿さが招く花もたまらぬ (石川・鹿島郡・田植歌) 『鹿島郡誌』『石川県の民謡』

。お鶴出てきて表の縁で稻こげば 若い衆が招く稻もたまらぬ (

長野・南佐久郡・盆踊歌) 『日本歌謡類聚』

最初の『田歌写』は、表紙に「天正元年」とある、いわゆる天正の田歌で、ほぼそのころの田歌としてよからうが、同じく天正の年号

をもつ『天正狂言本』所収、狂言『糸より』の小歌にも、「…心ばそくていとがよられてたまらぬ、いとよりてこいとよりて、矢はぎの殿におもわれよ」とある。

「…に溜まらぬ」止めの小歌が、田植の場などで、中世末あたりからうたわれていたことが右のいくつかの例によってわかる。つるべ井戸で仕事をするこの女鼠の口ずさむ小歌は、「米くれて」などとあって、おそらくは、鼠のうたう小歌としての改作・手直しらしき部分が見えているものの、その締め括りの句などによって、「…に(又はも)溜まらぬ」系統の類型を継承する恋の小歌であると見てよからう。もちろんこの常套句の裏には「気もそぞろで、恋の思いに手もとが狂って…」といった意味あいがある。

(11)

次に、俵に腰かけた、二匹一組で四組の鼠達が石臼を挽いている場面がある。それぞれ男鼠と女鼠が向かいあっていて、そのリズムのつて、小歌が出るところで、その筆使いは巧みである。

。臼を挽く夜にや必ずござれおもかてごしよか言ふてござれ (島

根・邑智郡・白挽歌) 『島根民謡』

。わしとおまへと白ひきや軽い白は調練ただ廻る (京都・丹後地

方・白挽歌) 『日本歌謡類聚』

などと、歌が続いてゆくような雰囲気がおもしろい。

そこで、

◎「さるさんしよの」でしける

と、とりあえず読める小歌で挽いている男風がいる。はじめ「さる」も合せて三字ほど明瞭でないが、「さんしよの」は「三条の」、「のてしける」は「野でしげる」の意であろう。

まず、御船歌類で取り用いられている小歌の一系統を拾い上げておく必要がある。

○ござれさんじやうの野で、ソリヤ野でしげる エンあんまりしげれはくるゝもしれぬ（『御船歌留』・上・さその春）

○うき名のたつにござれ むう条のそりや こされ三条のゝでそりやんれ野でしげる（『御船歌稽古本』・天・さその春）

○こゝてしけれはうき名のたつに こされ三条の ヤソリヤござれ三条の野でしける（『幕府舟唄』・さその春）

この御船歌に見えるものと近い歌詞は、『松の葉』・巻一・葉手・比良や小松の中の、

○こゝは三条か、やれ釜の座か、一夜泊りてしげりまいらしよ…

…（同歌は『大幣』・石引にも）

に見える。右の歌の後半部分（省略）は、慶長十五年名古屋城普請のときうたわれたものと伝える。

「ござれ三条の野でしげる」は、おそらく元禄期をいくらか逆上った時期から、広くうたわれていたものであろう。「繁る」が、男

女の情交を意味しているのは当然のこと、このような歌が、若者の集まる夜なべ仕事の場に出されていたのである。

(三)

右の小歌をうたう鼠と相挽きするもう一方の女鼠のところに、

◎こよい一よのおてまくら「さんさきのとくや」

と書き込まれてある。「一よの」の部分、まぎらわしいが、一応私はそう見ておく。この前半部分については、まず『延享五年小歌しやうが集』が書き留めている、

○今宵一夜のお手まくらぞや明日は出船の波枕

を、最も近いものとして掲げるべきであろう。『延享五年小歌しやうが集』では、この歌に続いて、やはり「お手枕」の小歌、

○様と寝た夜は枕もいらぬ互い違ひのお手枕
がくる。また、『踊唱歌』の

○あすは出ようずもの 引 船が出ようずもの今宵ばかりのお手

まくら（豊後踊 前半は、狂言『靱猿』・虎寛本など、にも）
も見え、『延宝三年書写踊歌』では、

○いつかおゝせのなみまくら（うへさまをどり）

であり、この「波枕」の小歌は、周知の如き、

○今宵一夜はどんなの枕明日は出船の波まくら（北海道・三重其

の他の地方の、沖揚歌・船歌などに共通）

。今宵一夜はどんすの枕あすは出船の波枕（新潟・南蒲原郡・益歌）『旅と伝説』・七巻六号

のようにうたい継がれている。「梶枕」とするものも、狂言「鞆猿」の小歌の他、例えば、

。今宵今夜はどんすの枕明日は出船で梶まくら（岩手・気仙沼・船歌）『気仙沼地方民謡重謡集』

。思ひ定てきたきも　もとの一ゑへは残るもの　旅はよのちの子がくぐる　明日は船出の梶枕　ざらハハの暇乞（与論島十五夜祭踊歌）『語り物・風流ニ』

の如く広く見えている。つまり「お手枕」「波枕」「梶枕」の小歌の流れがこのように見うけられるということである。

白挽鼠の口ずさむこの小歌は、やはり最も近い例としてはじめに置いた『延享五年小歌しやうが集』のものと同型の、主に酒宴歌や船歌として行われていたその系統の前半であった。「明日は出船の波枕」まで書かないで、次に「さんさきのとくや」と続けておいたのは、あるいは、白挽の場面に、出船や波枕が合わないとして、意識的に削ったのかもしれない。

「さんさきのとくや」の「さんさ」を、近世前期「さんさ節」囃子詞と関係させるなら、『糸竹初心集』・菅笠節、『松の葉』・巻三・さんさ節、『若緑』・端唄・さんさ節、などが参考になるであろう。「きのどくや」についても、言うまでもなく、はやくは女歌

舞伎踊歌「おもひまはせはきのとくしやなふ」（京大本『国女歌舞伎絵詞』）を引いておけばよからう（これは「おもひまはせはきにくすり」と対になる表現）。下って『落葉集』にも、この語句をうたい込んだものがある。こうした歌詞を取り込んでるのは、はっきりしないが、江戸中期以前であろうか。

この「今夜一夜のお手枕」と、(二)で見た「こざれ三条の野でしげる」系統とは、一対のものとして書きこまれたはずである。この男鼠と女鼠は一つの白を両方から綱で引きながら掛け合っている。男鼠は、今夜の逢引きを「繁る」の語を出して暗に女鼠に持ちかけ、女鼠は、「今夜一夜のお手枕」とうたって、暗にその恋の誘いを受け入れている。鼠は、そのまま若者と娘におきかえてよい。仕事の中で生きていた歌謡がありと描かれていておもしろいのである。

(四)

白挽きをしている隣では、箕で糶がらを払う女鼠達が居り、その前で米粒を拾う子鼠が、男鼠にしかられている。それを乳呑鼠を背負った子守鼠が来て見ており、料紙の継ぎ目にかかって読みづらいつたのであるが、後半とおぼしき部分だけにしぼると、

◎かうじうりにまいった　ねいろやいねんねこやい／＼と書きつけられている。当時の子守歌の断片であろう。これと同歌

は見あたらないが、「麴売りにまいった」の部分は、子守歌で、

○鳥島ごん鳥　うちの父はどこに行つた　麴取りに参らつた……

(山形)『日本伝承童謡集成』・以下同じ

○からす　じじどこさ行つた　番所起きて番所起きて　麴買いに
まいつた　その麴なじよにした(宮城)

などあるのに合わせ見ておいてよからう。「売りに」とするのは、
いまのところ見つけにくい、主に中部・関東・東北地方へ広がる
伝承である。ただし、中部地方では、

○おらのとこの鳥　麴箱負うて　沢沢巡つて(新潟)

○からすとんびどこへ行く　なにになに持つて行く　麴三合米三合

(長野)

などとなつて、変化している様子がうかがえる。もしこの『ねずみ
のさうし』が、都で描かれ書かれたものであるならば、近世以後は
東日本でうたわれてきた型が、当時は都にも普通に用いられ、寝さ
せ歌としても人々の口に上つたということになる。『ねいろやい
ねんねこやい』の「ねいろ」という言い方は、現在までに採集され
ている子守歌の中では、「ねえろねえろ」(静岡)、「ねいれ、う
つつけ雉子の子よ」(長野)などの口調に近いと言える。記載され
た最古の子守歌と言われている『聖徳太子傳』所載子守歌でも、「
寝入れねいれ小法師」ではじまる。

東京国立博物館本及びサントリー美術館本の『鼠の草子』にも、

この子守鼠が立っていて(こちらは子鼠を抱いて)

◎ねいろく　ねゝつこ　ないてねうにとられるな

とある。「ねう」、つまり猫を持ち出す子守歌は、「ねないと猫に
かしられよ」(『弄鳩秘抄』)の如くあつて、鼠の物語であるから
特にそうしたというわけでもあるまい。

(五)

二匹一組の男鼠が三組、女鼠が二組、米搗きをしている場面が次
にくる。男側のうたう小歌が、

◎に[ち]やうめさんちやうめハやみでもとおる[は]なのしちやうめ
ははしつきよく

である。米搗き歌である。この「二丁目三丁目四丁目」のように数
えてゆく例は、たとえば、

○一丁二丁三丁四丁ある中で中の三丁がままならぬ(木曾地方・
馬追歌)『木曾民謡集』

などしばしば見られるが、この小歌との直接的継承関係の歌謡
は、次に示す御船歌の中に流れ込んだ一節ということになる。

○京は一条今出川　二条堀河　三条室町　四条五条は暗くにごさ
れ　花の六条は星月夜そもし恋にはのゑいそりやしな(嘉永二
年書写『新御船唄』国会図書館蔵・呼出し吉川)

○京は一条今出川　二条堀河　三条室町　四条五条はくらくとこ

ざれ 花の六条は星月夜 そもし恋にはのゑいそりや（有吉保氏蔵江戸末期書写『古新御船唄集』・新御船歌・葉歌・呼出し

吉川）

「呼出し吉川」なる曲の中に取り入れられているはやり小歌である。右掲二種ともに、古御船歌と新御船歌の二部構成になっている伝本のようであるが、引用箇所は「新御船歌」に組み込まれているものである。「新御船歌」の「新」が、文字通り歌詞の上でも新しいものの当世流行のという意味なら、そのへんにこの端歌のさかんにうたわれた時期がほのめかされているのかもしれない。鼠の小歌として見えているその小歌の系統を受け入れて、御船歌の端歌の、京の固有名詞を入れる型が生まれたと言えるのかどうかもまだ疑問であろう。鼠の小歌も、完全な近世小歌調であって、これが、『松の葉』所収歌謡などよりもより古い近世初期小歌であるとするのにも躊躇される。次に見る、女鼠の小歌とも合わせて、江戸中期のはやり小歌と推量しておいてもよい。

（六）

米搗の女鼠も、また小歌で精を出している。

◎あめはふるとも身ハぬれやしよまい 君のなさをかきにきて
女鼠達の口に出るに似つかわしい小歌であろう。この近世調小歌は、民謡としても定着して広く親しまれてきた。

。雨は降るとも身は濡りやしよまひ様の情を笠に着て（『延享五年小歌しやうが集』）

。雨は降るとも身は濡りやせまひ様の情を笠と被て（『山家鳥虫歌』・但馬）

。雨は降るとも身は濡れまいよ君のなさを笠と着て（『尾張船歌』・万松寺）

。雨は降るとも身は濡れやせぬ様の情を笠に着て（愛知・北設楽郡田峯・盆踊歌）『三州田峯盆踊』

。雨は降るとも身は濡りやせまい様の情を笠に着て（兵庫・多可郡・盆踊歌）『日本歌謡集成』・卷十二

。雨は降っても身はぬらしやせぬ様の情を傘に持つ（大分・姫島・盆踊歌）『姫島の民謡』

以下用例は省略するが、この系統歌は、同様に「情」をうたう、

。鮎は瀬に住む鳥や木にとまる人は情の下に住む（『延享五年小歌しやうが集』）

。鮎は瀬につく鳥は木にとまる人は情の下に住む（『山家鳥虫歌』・越中）

とともに、近世俗謡の代表的な一つである。（『鮎は瀬に住む』の方の初見は、『落葉集』・巻四・こんぎやら踊、に見えるものである）。女鼠のうたうこの小歌は、古く見ても、例えば『松の葉』所収歌謡が隆盛であった時期を逆上るものでもなからう。

(七)

この別本『ねずみのさうし』では、以上引き出したものの他に、その『古奈良絵本集』の解説で、岡見正雄氏が、つるべ井戸の場面で、

◎しんろうくろうわすれんぞ　こよいはごていとねてかたらはん
また、米搗の場面で、

◎おもふとの□　ねるとき　さとうもち　くらよふ

と、合わせてこの二箇所をも小歌としておられる。いまのところ、同類型を添えることができないのではっきりしないということになるのであるが、近世歌謡として口ずさまれていた雰囲気はたしかに持っている。すなわち、前者は、「からさがちすりや手に豆できる、晩にや殿御と寝てつぶす」（大阪地方・麦打歌）のような雰囲気をもつものであり、後者も、例えば、「ヤアせいた米上と口吸えば、砂糖か甘草かけにまことヤア京の柳酒飲むごとく」（徳島・板野郡・風流踊歌）などを思わせるものである。

『古奈良絵本集』解説に「本絵巻は煙草とか、髪のかい様等の風俗から見ると近世初期のものと考えられるが」と述べられている。近世初期成立とするなら、今右に見てきたそれぞれいくつかの系統の小歌において、この『ねずみのさうし』に載ったそれぞれの例こそがむしろ古い用例となってくる。

しかし、それぞれの小歌の類歌を、歌謡史の上で見ると、近世初期あたりに逆上ることの難しいと思われる場合もある。それぞれの小歌の類歌を、中世末から近世初期に求めることのできる場合が少なくとも言える。もちろんやはり小歌のすべてが書き留められたわけでもあるまいし、また記載時から少し逆上らせて、その歌謡の隆盛を見ておいてよい場合もあり、時期的な問題はさらに検討しておいてよい。

ともかく、この『ねずみのさうし』に登場する風達の小歌は、歌謡が実際にうたわれた場や雰囲気伝えて歌謡文芸上興味ある存在である。

(八)

東京国立博物館本の『鼠の草子』では、すでに『続日本歌謡集成』中世篇や右掲『奈良絵本集』、解説などでも示されているように、

◎こひしゆかしとやる文を　せたのながはしておとした　あらな
さけなの文のつかひや　をれもこひしといふふみをとこてやら
にてをとした

がある。サントリー美術館本でもほぼ同じのがあり、岡見正雄氏の解説によると、桜井氏蔵『鼠の草子』にも、この小歌が見えている。すでに先学によって指摘されているように、『閑吟集』・293番と

して書き留められたもので以下狂言小歌にも取られているものである。類型を、広く「玉章を落とすパターン」で求めるなら、まだ新しく加えておくべき民謡の用例があるが、大要は浅野建二氏『閑吟集研究大成』で尽されているので、ここには省略する。続いて、

。あすはとのよねつき あねぬきあげぬきおろし どつち
くつかふよ（東京国立博物館本）

。ふくかぜもころあれ たまづきをきみがたもとにふきこめ
うたはうたへどひもじさよ（桜井氏本）

などが紹介されている（前者は暗喩がある）。

奈良絵本『やひやうゑねずみ』（下）での、

。見じ聞かじ思はじ言はじ世の中は柳はみどり花はくれなる

の下旬が、当時聞かれた小歌によっている、と言つてはしまえないであろうが、紅梅・紫とて二人の遊君が一きし舞うくだりに、

◎みすのおいかぜにはひくる げにやあづまのはてまでも 人の

心のおくふかき そのなきけこそみやこなれ

がうたわれる。これは言うまでもなく、狂言『花子』の小歌に、

。妻戸をきりと押し開く 御簾の追ひ風匂ひ来る 人の心の奥

深き その情こそ都なれ 花の春紅葉の秋 誰が思ひ寝と成り

ぬらん（大蔵虎明本）

として出てくるものであり、それらは謡曲『千手』の地上歌の

。妻戸をきりと押し開く 御簾の追風匂ひ来る 花の都人に恥

かしながら見えん げにや東のはてしまで 人の心の奥深き
その情こそ都なれ 花の春紅葉の秋 誰が思出となりぬらん
から出ているように、いまのところは見うけられる。この部分は、
また『つゆ殿物語』で、つゆ殿が吉原町の美女御前の館へ忍び、酒
宴を催すくだりに利用されている。

鼠の異類譚系統としては、さらに「かくれ里」の米搗歌^(注4)について
も、ふれておくべき点があるが、紙幅の都合ここには省略する。本
稿でとりあげた『ねずみのさうし』と同系の絵巻「鼠の権の頭」で
出てくる梓巫女の神降り歌については、ここでもくり返し述べる必要
もないであろう。

注

1 『女子大國文』・5号所載、岡見正雄氏「鼠草子」による。

2 『日本古典文学全集・御伽草子集』（大島建彦氏校注訳）所
載の「鼠の草子」による。

3 「柳緑花紅真面目」（『禅林類聚』・経教草）は、禅林の好
んで用いた句であろうし、謡曲では『東岸居士』他に見え、
中世近世小歌では、『宗安小歌集』、『隆達小歌』、『寛永
十二年跳記』などに、これを用いたものが見えている。

4 さなへのはにはいなこもつきそ とらけのねこはこゑもいや
よ

— 昭和五十四年一月 —

（関西外国語大学教授）